7、成果と事業化の見通し

1、産卵については、当結果を合理的な養殖経営に応用することができると思われる。

2、ふ卵器を用いたふ化技術については、成績が良く、従来のふ化場に比べふ化管理は容易になり、利点も多く、大量に種苗を生産することができるので、十分実用化できると考えられる。

3、本県は、商品サイズまでの養成期間が他県（4～5年）に比べ2～3年と短かいので、スッポン養殖は、疾病対策が確立されれば、本県の温暖な気候を生かした特産的産業としての発展が期待できる。

8、文　献

参　考　文　献

1）稲葉伝三郎、1962：スッポンの養殖、淡水増殖学、恒星社厚生閣、301～305。

2）梶純夫、1967～68：スッポンの養殖、養殖、4（4、5、6、8）、5（6）。

3）梶純夫、スッポン、ドジョウ・スッポン・ヘラブナ、恒星社厚生閣、189～231。

4）梶純夫、1971：スッポン、養殖種苗の上手な作り方育て方、日本養殖新聞社、244～265。

5）余延基、1971：甲魚之養殖、水産養殖浅説、No. 41、台湾省水産試験所。

6）服部中村養殖場、スッポン（パンフレット）

7）大分内水漁試、1973：淡水養殖の手引（スッポン）

8）沖縄水試八重山支場、1973：亜熱帯地域のスッポン養殖技術研究、指定研究。

9）　〃　1974：　〃　〃